

つの点で苦勞した。もとより自分の薄学が原因だが、教育に関しては『山梨県教育百年史』が既に刊行されており、新資料の発見が困難だった。甲府市が戦災にあり、資料の多くが消失してしまっていたこともまた困難性を倍加させたのであった。文学の記述では文学と文芸、ドイツ文学の古典的手法で言えばポエジーとリテラツールの扱いをどうするか、つまり文芸性の高い作品とその作家及びその影響に限定するかいなかの問題であった。この点に関して甲府市史の「文学」の事項の記述にかかわった四人の委員の間の統一の見解を見出すのにも容易ではなかった。

また直接担当した俳句に関しては戦後俳句文学が、『雲母』に限定されるような甲府市の俳壇状況にあり、同人レベルで言えば短歌に比べ、甲府在住在所属の結社数も少なく、記述の多様化に困難を感じたものである。そんな意味で委員の皆さんや事務局の方々に種々御迷惑をおかけしたが、一方私個人について言えば多大な学習にもなった。とりわけ近世部会の「学芸」の事項に関しては、近世甲州の儒学史や思想に関する領域は個人的人物や典籍の一部しか理解がなかったもので、高須芳次郎氏の「近世日本儒学史」などを改めて読みなおすといった作業から始めたので、自己学習には大いになった。先行研究が少ないという意味では、甲府狂歌史の記述についても色々勉強させられた。『吉原十二時』に甲府狂歌師の作品が登場するぐらいの知識しかなかったので、近世甲府狂歌壇の記述を一応まとめ、一つの傾向性を把握出来たのも市史にかかわった恩恵だと思っている。

川柳に先行する雑俳についても同様で、前句付けの若干の知識があった程度だったが、この機会に雑俳の原典二〇冊ぐらいを読み得

たのは幸せだった。今後この面の追求をよろうと考えている。

近代では、『新体詩歌』の全五冊を史料編に収録出来たのも忘れ難い。日本で二番目に刊行された詩集であるが、これまで翻刻出版されていない。市史史料編に収録し、研究者の便に供することが出来たことはすばらしいことだと思う。またその出版社「徴古堂」が東浦栄次郎の個人会社でなく、甲府の町衆や地方の豪農たちによって作られた会社であったことが明らかとなった点も意義深い作業であった。

なお委員長の磯貝先生から本文批判とかかわって、平安期の国語の音便について質問を受けた体験は、研究の厳密性といったものについて教えられ、感銘を受けた。一資料の引用について一語の音便まで確かめようとする先生の研究者としての態度には敬服させられた。自分の研究態度の安易さへの反省を強くうながされたものだった。

総括して大いに勉強させられた市史の編纂であったように思われる。

「甲府市長期統計」編集を終えて

専門委員 八 束 厚生

甲府市統計をもとに甲府市一〇〇年の姿を市民に分かりやすく伝える小冊子を作成することを企図して編集作業が開始された。このとき用意された統計書は、

「甲府市統計一斑」(明治三十五年)、「甲府市統計書」(明治三十七年—明治三十九年、明治四十一年、明治四十三年、明

治四十四年、大正元年、大正二年、大正四年―大正十四年、昭和元年―昭和十年、昭和十三年)

であった。

ついで、戦後の甲府市統計書について調査・収集作業をおこなったところ、確認されたものは、

「甲府市勢要覧」(昭和二十三年、昭和二十五年―昭和二十九年、昭和三十一年、昭和三十二年、昭和三十四年、昭和四十六年、昭和四十七年)、「甲府市統計要覧」(昭和四十八年、昭和四十九年)、「甲府市統計書」(昭和五十年、昭和五十一年、昭和五十三年、昭和五十四年、昭和五十七年―昭和五十九年、昭和六十一年―平成元年)

であり、戦後の甲府市の統計について実質上利用可能な統計書は昭和四十八年の「甲府市統計要覧」以降であることが判明する。

利用可能な甲府市統計書が、戦前期は明治末期から昭和十年まで、戦後期は昭和四十八年以降に限られることが明らかとなり作業は大きな障害に直面した。当初、「糊と鉄」でできると想定されていた統計表の作成そのものに唯一の利用可能な労働力資源を投入する必要に迫られたからである。

そこで、編集方針を、学生・社会人を対象としたコンパクトで実用的な甲府市統計ハンドブックを作成することに切り換え、「国勢調査」、「工業統計」、「商業統計」、「家計調査」、「財政統計」など、甲府市にかかわる基礎統計の収集・整理にはばすべての作業をあてることにした。統計書の編纂ともなれば、各統計に関する解説のみならず、各統計に関する利用上の注意(調査方法、分類基準の変更など)、統計用語の説明などの必要性がでてくるものの、こ

れらの多くは断念せざるをえなかった。また、農業統計では「山梨県農林業累年市町村別統計」、工業統計では「工業統計調査結果報告」、商業統計では「山梨県商業統計調査結果報告」を資料として利用するなど作業の効率性から資料の選択がおこなわれたものもある(「工業統計」と「工業統計調査結果報告」との間で実用上大差がないとも判断した)。

まったく予期せざる航路に単身乗り出したものの上記の統計についてはほぼ可能なかぎり入手できたと思う。特に大正九年以来の「国勢調査」は、単に総人口の推移だけでなく年齢階級別人口の推移、就業者(有業者)の産業別構成の推移をも伝えており、戦前期の甲府市を語る上でも不可欠の貴重な情報を提供している。一方、作業の遅れから消費者物価統計の多くが収録されなかった。運び込んだ荷の値踏みは市場に委ねるとして今はただ航海を終えた解放感に浸りたい。

(市史編さんを終えて)

専門委員 山本 多佳子

私は市史編纂事業に一九八六年から七年間携わったことになる。その間、通史編二巻と史料編三巻にダイジェスト版を出したので、いつも市史の原稿締切に追いかけていたような感じてあった。限られた時間と、これまた十分とは言えない私の能力ギリギリのところまで私なりに頑張ったつもりだが、振返って心残りの点もないとしない。執筆者としては、関係者の聞き取り調査や、無駄も出来る余裕ある史料調査も行って奥行のある市史にしたかったと思ってい